

「茶旅」

”ごぼればなし“

(18)

茶縁は続くよ、 ごぼればなし

コラムニスト 須賀 努



茶旅とは、お茶をキーワードに旅すること。これを続けて早15年。これまで実に様々なご縁に恵まれ、旅を続けている。お茶が如何に素晴らしいキーワードであり、頼もしいサポーターであるかは、旅をしている本人が一番よくわかっているつもりである。茶縁とは一体どんなものだろうか、今回はその一例を紹介してみたい。

2012年10月といえば、前月に尖閣問題が火を噴き、日中間係は最悪の状況を迎えていた。そんな時にのこと、湖南省の益陽市に安化黒茶を見に行った。見に行つたといつても何のツテもなく、雨の降る土曜日の午後に着き、仕方なく益陽茶廠の代理店を訪ね、何とか糸口を探した。す

ると、横に座っていたおじさんが、安化黒茶の歴史を丁寧に教えてくれた。誰だろうと思っていると、何と益陽市の茶葉局長であり、安化の茶工場経営者を紹介してくれた。

安化は数百年に渡って茶葉を供給してきた一大茶産地。ここに行けるなんて願ってもないこと。翌日安化に向かうと、そこでは女社長、鄧さんの誕生日が開かれており、酔っぱらった彼女から『こんな時期によく来てくれた』と言ってもらい、茶工場を案内された。そこでは伝統的な千両茶作りが行われており、貴重なお茶(カチンカチンの輪切り千両茶)をお土産にもらってしまった。

それから3年経つた昨年の暮れ、湖

店主が飛び出してきた。紅茶を求めてくる客は残念ながら多くはなく喜んでくれた。そしてその店主は何とあの3年前に出会った女社長と同郷、いや親戚であることが判明し、さらに話は盛り上がる。これだけ多くの茶荘の中から、この店を選ぶとは、まさに茶縁以外の何物でもない。その店主が安化の茶畑の写真を見



モスクワで会った中国人茶商から米磚茶を入手

せてくれたが、その中の1枚に西洋人が写っていた。なんとロシア人だという。ロシアでも最近是中国茶がブームになっており、彼らにとつての歴史的な茶葉供給国である中国への関心が高まっている。彼らはわざわざこの湖南省まで、自らの飲んでいるお茶、そしてその歴史に触れるために来たらしい。更にはモスクワで茶商している中国人もいるというので大いに関心を持った。

筆者は近年、中国からロシアへの茶葉の道、いわゆる『万里茶路』に大いに惹かれており、その旅が続いている。先日ついに中国からモンゴル経由でロシアへ飛び出してみた。この旅は別途ご紹介したいと思うが、その過程でモスクワへ行き、長沙の店主に紹介してもらった、中国人茶商に会うことができた。先日見た写真に写っていたロシア人は実は彼の関係者だった。モスクワの茶商から、現代ロシアのお茶事情を聞き、実際にロシア人やウ

南省の省都、長沙の茶葉市場を訪ねた。安化黒茶の知名度向上により、長沙には少なくとも4つのメジャーな茶葉市場ができており、その1つ1つには300軒ほどのお茶屋が軒を連ねている。相変わらず、何のツテもなく、ほぼフリーリングで店を選ぶのだが、表に『雲台大葉紅茶』という文字が見えたので、何となく入ってみた。

安化は黒茶が有名ではあるが、実は昔から紅茶も作っている。調べてみると、1915年の万博で金賞を受賞したとの記載があった。1915年の万博といえば、確か祁門紅茶が金賞を取つて世に知られ、その後インドのダージリン、スリランカのウバと並ぶ、世界三大紅茶の1つとまで言われるほどになった。だが対照的に安化紅茶は忘れられてしまった。それが最近の黒茶ブームで安化が見直され、紅茶も伝統的な製造法が復活してき

たらしい。その店で『紅茶はあるか』と聞くと、

クライナ人がどんなお茶に関心を示しているかを、彼の顧客を通して見る貴重な機会も得た。ロシア人は基本的に紅茶を飲むのだが、万里茶路を通じて、湖北省羊楼洞から、紅茶を固めた米磚茶というブロック型の茶も運ばれていた。その歴史的な茶を実際に羊楼洞で見ているのだが、手に入れることはなかった。後から急にほしいと思い、北京茶葉市場などを駆け巡つたが、ついに見付けられなかった。

その米磚茶を何とモスクワの彼が持っていた。2008年に製造された復刻版で輸出用。目的地はロシアだったが、すでに大半のロシア人はティバッグしか飲まず、磚茶を削って煮出して飲むなどという面倒な作業は過去の遺物になっていた。それを最近中国人が態々モスクワまで買い戻しに来ると聞いてびびくり。お茶は世界を駆け巡っている。だから茶旅は面白い！

(すが つとむ)